

コロナ自粛でふた月ぶりの例会。ためらいながらの再開ではありませんでしたが、いつもとあまり変わらない8人が顔を合わせました。輪読が始まるとみんなマスクを外して音読に専念。後醍醐方が力尽きて比叡山を降り、親王を奉じた新田義貞が越前に向かうなど、動乱の急展開を読みました。休日の関係で例会を開けない9月に予定していた博多行きは断念し、近場の代案を次回、検討へ。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

- (一) 山攻めの事並びに千種宰相討死の事
- (五) 高豊前守虜らるる事

比叡山合戦

(P114～117、135～137)

湊川合戦に敗れた後醍醐方は比叡山に逃れ、東山麓(東坂本)に御所と陣營を構えた。京都を制圧した足利方は琵琶湖西岸の大津周辺と西山麓(西坂本)に軍勢を進め、両方面から後醍醐方を攻撃した。後醍醐方は新田勢と比叡山衆徒で迎撃し、一進一退の激戦を展開。乱戦の中で後醍醐天皇側近の千草忠顕が討死、足利方も西坂本方面の大將、高師久が捕まって斬られた。

- (十) 義貞合戦の事

義貞・尊氏の一騎打ち成らず

(P162～167)

戦局が膠着するなか、新田義貞は足利尊氏に決戦を挑もうと敵陣の東寺近くに迫り、一騎打ちを呼び掛けて矢を放ち入れた。尊氏は応じようとしたが、側近の武將、上杉重能に引き留められて思い止まった。この後の撤収戦で、後醍醐方の名和長年は、自ら退路を断って討死。これで、「三木一草」と称された後醍醐天皇の四人の寵臣、結城親光、名和長年、楠正成、千草忠顕が全員、動乱の最前線で戦没した。

- (十一) 江州軍の事

兵糧攻めで後醍醐方窮迫

(P168～173)

足利方は、比叡山衆徒が後醍醐方に兵糧を運び入れるのを阻止しようと、近江戦線に動員していた甲斐源氏の佐々木貞宗に琵琶湖水運の封鎖を命じる。佐々木勢が作戦を展開すると、近江を地盤とする佐々木道誉が「ここは当方代々の領土だから」と尊氏から軍事指揮権を得て甲斐勢に入れ替わり、兵糧攻めの前面に。地元勢ならではの動員力と機敏な用兵で、必死に抵抗

する後醍醐方を追い詰めていった。

- (十二) 山門より還幸の事
- (十三) 堀口還幸を押し留む事

天皇の下山に武將の抵抗

(P173178)

後醍醐方の窮迫に付け込んで、尊氏は天皇に巧みに下山を持ちかける。「われらの敵は新田。政治はお任せしますので、京都へお帰り下さい」。天皇は独断で京都への還幸を決意、即座に用意を始めた。驚いた新田義貞の將、堀口貞満は天皇に「朝敵尊氏の軍門に下るとはなんとということ。どうしてもというなら、われら一族の首を刎ねてからにしてほしい」と詰め寄った。天皇は義貞らに対し「尊氏と和睦するのは、天運が開けるまでの時間稼ぎだ。恒良親王に譲位するので、これを奉じて越前に下り、再起を図ってほしい」と諭した。義貞は天皇の真意を知って感激し、天皇の命令に従う決意を示すため、日吉大社に源氏伝家の宝刀「鬼切」を奉納して、朝敵を亡ぼす武運を祈願した。

- (十七) 還幸供奉の人々禁獄せらるる事
- (十八) 北国下向勢凍死の事
- (十九) 瓜生判官心替はりの事

苦難連続の越前入り

(P185～192)

足利方は京都に帰った後醍醐天皇を事実上幽閉し、三種の神器の引き渡しを求めるなど、厳しい処置で臨んだ。渡した神器はかねて用意していた偽物だったとされる。越前に向かった新田勢は、足利方の越前守護、斯波高経に阻まれ、雪中の木の目峠迂回で大勢が凍え死んだ。敦賀・氣比神宮の用意で金ヶ崎城に入るが、杣山城の瓜生保の離反に遭うなど苦難が続いた。

第19巻輪読予定ページ(8月17日)

- 1) 306 左中将～308 寄せける
- 2) 308 尾張守～312 隔てたり
- 3) 312 この川～315 七十三ヶ所なり
- 4) 315 新田義貞～318 給ひにけり
- 5) 322 奥州国司～326 揚げたりける
- 6) 326 これを先～330 過ぎざりけり
- 7) 330 これを聞～333 知られたり
- 8) 333 坂東の～336 落ちて行く
- 9) 336 五番に～339 甘心せられける
- 10) 339 さらば～  
343 ～くたされける